

No.2518

相互行為から生成する経済

—トンガ王国村落における贈与とふるまいの民族誌—

国立民族学博物館 外来研究員／日本学術振興会 特別研究員 PD

比嘉夏子

本助成の研究課題「相互行為から生成する経済-トンガ王国村落における贈与とふるまいの民族誌」に基づき、下記内容の単著を京都大学学術出版会より刊行することとなった。

本書はトンガ王国において人びとの生活の根幹を成すふたつの事象、「贈与」および「ふるまい」に焦点を当てることによって、経済実践をミクロな見地から捉えなおし、人びとによる緻密な相互行為の連鎖と集積によってこそ、トンガの経済が支えられ駆動していることを実証的に示す、野心的な民族誌である。

トンガの人びとにとって贈与や交換、分配は儀礼的場面のみならず日常生活においても重要な役割を果たしている。しかしそのような経済実践においては、たんに多くのモノや貨幣を所持し、そのモノや貨幣を他者に移譲するだけでは不完全である。それらの場面では常に、行為者の身体を投じる直接的な参与およびその場にふさわしい行為のしかたが求められており、人びとはそうした「ふるまい」を互いに注視し、その「ふるまい」によって互いを認識・評価していた。つまりそれはやりとりされる「モノ」とそれに相応した人びとの「ふるまい」が組みあわさることによってこそ、はじめて「贈与」が立ちあがってくるという事実である。このような「モノ」と「ふるまい」の不可分な絡み合いと総和こそ、動的で生成的な営為としてのトンガの贈与を可能にしている。

本書が明らかにしたように、近代貨幣さえもかれらは「ふるまい」のなかへと積極的にとりこみ、ときに踊りや道化などといった実践のなかに配置していくことによって、贈与の場を活性化させている。トンガの人びとが資本主義という経済システムの波にさらされながらも、人間存在が疎外されてしまうことを巧みに回避しているのは、まさにそのようなささやかな日々の実践の積み重ねと「ふるまいの束」に依っているのである。